



新連携・地域資源活用・農工商連携

伝統薬で健康に貢献する～伊勢くすり本舗の挑戦～

独立行政法人 中小企業基盤整備機構

新事業支援部 連携事業支援課 立石美和子



おはらい町の販売屋台

紹介事例の概要

団体名 伊勢くすり本舗株式会社
 認定事業区分 地域資源活用
 認定事業名 萬金丹の特徴を活かし開
 発・製造した『伊勢国朝
 熊岳萬金飴』の販路拡大
 事業
 認定日 平成23年2月2日

■事業の概要

「越中富山の反魂丹、鼻くそ丸めて萬金丹」という歌をご存じだろうか。50代以上の方は聞いたことがある方が多いかもしれない。伊勢くすり本舗では、伊勢の地に600年の昔から伝わる萬金丹という伝統薬の成分を練りこんだ「萬金飴」を製造し、伊勢神宮内宮前のおはらい町で伊勢土産として販売している。黒糖の食べやすい味に調えられているが、



賑うおはらい町の様子

ほんのりと生薬の香りがして、いかにも薬の効果が得られそうな飴である。伊勢くすり本舗は、平成16年に立ち上がった比較的新しい会社である。同社がなぜ、伝統薬にまつわる商品開発を行っているのか、その理由を紐解きたい。

■伊勢の伝統薬「萬金丹」の歴史

中国の医学・薬学に関する書物が日本に入ってきたのは、奈良時代の頃である。室町時代末期には医学校が設立された。江戸時代には日本独自の理論も発達するようになり、各藩が医師の養成や薬の研究に力を入れるようになる。薬草を丸めて作る丸薬の製法が確立されたのも江戸時代中期だと言われている。伊勢地域においては、昭和初期まで、鎮驚丸、龍心湯、金粒丸など、100もの伝統薬が一般に使用されていた。江戸時代中期にはこの地域の薬草の研究が行われ、野呂元

丈などの著名な本草学者も輩出している。その頃盛んに行われていた「お伊勢参り」では、年間100万もの人が伊勢神宮を参拝していたと言われている。人口比にすると20人に1人は参拝していたことになり、当時の交通事情を考えると信じがたい数字だが、町や村ごとに旅費を積み立て、年1回輪番制で代表参拝者を出すという方式が全国各地で定着していたようだ。また、御師（おんし）という、今で言うところの旅行代理店業者までいたというから驚きである。伊勢は一大観光都市でもあったのだ。

そうして老若男女、庶民や農民までもが全国から集まる伊勢においては、軽量で持ち運びに便利で、腐らず保存ができる土産物が喜ばれた。特に萬金丹は、お伊勢参りの有難い土産物として、旅の常備薬として、全国的に知られた薬であった。街道の発達により売薬行商（大道売り）や、歌舞伎や落語の興行との巡回が盛んに行われ、効能書きや口上売りの聞き伝えで、農村の一般家庭にも薬が普及し、病気への対処法が庶民にも浸透していたと言われている。

しかし明治時代に入り、政府は西洋医学を主導。特に昭和戦後は、法規制が厳しくなり、その日の気温や湿度で製造方法を交える、いわゆる「さじ加減」で品質を保ってきた伝統薬は、長い歴史の中でその安全性は証明されていたものの、医薬品の国際標準化の流れの中で徐々に姿を消していくこととなった。



加藤宏明氏

■加藤家の歴史

伊勢くすり本舗の代表、加藤宏明氏の生家は「加藤翠松堂製薬」という製薬業を営んでいた。加藤家の歴史は古く、室町時代末期の元亀元年（1570年）に製薬業を開始している。加藤氏は、加藤家第24代目当主である。

加藤家では代々家伝薬を製造し、江戸時代文化・文政の頃には全国販売を行う許認可を得ていた。その製造法は秘方とされ、父子相伝の形で継承されてきた。幕末の頃には、後に明治政府の初代軍医総監となった松本良順の為書の刷り込まれた広告宣伝で、「百毒下し」という家伝薬を全国に広めた。大正時代に入ってから、東京・大阪、海外はインドネシアにも支店を置き、マレー半島、中国、台湾、東インド、朝鮮、ハワイ、北米等へも販売網を広げていったと言う。

しかし戦後、先に述べたように伝統薬は衰退の一途を辿り、それに伴って伝統薬の製薬メーカーの廃業が相次いだ。その頃、事業を縮小しながらも製造を続けていた加藤翠松堂製薬が伊勢の伝統薬

「萬金丹」を受託製造していた。加藤氏が誕生して以降も、水害、アンブルショック、融通手形の不渡りなど、会社経営は厳しい状態が続いていた。

大学を卒業して薬剤師になった加藤氏は、渡米を決意。明治以降、日本が長年手本としてきた現代医療の現実を目の当たりにする。アメリカでは、製薬会社が高額な薬の販売に躍起になっている一方、無保険者が国民の7人に1人もいるという状況であった。翻って日本に目をやると、医療機関ではポイント制に便乗した薬の過剰使用が指摘され、日本人の薬の消費量は世界一。当時使用されていた薬というのは、症状を押さえつけるか覆い隠すもので、根本的な治療になっていないものがほとんどであったため、薬無しでは生きられない生活を強いられたり、体が本来持っている治癒力が弱まる等、薬の弊害も出てきていた。

そんな中、アメリカで見聞を広めた加藤氏は、アリゾナ大学で代替医療を研究しているワイル教授と出会い、健康になる方法や健康を維持する方法を学び、影響を受ける。予防を重視した食生活や代替医療を取り入れる健康志向の高い層が存在することも知り、体の治ろうとする力を引き出すことや、日本で長い間体に良いとされてきた伝統薬について調べることを目指すべき方向性と定め、帰国した。その頃、加藤翠松堂製薬の経営は化粧品会社に100%移っていたため、伝統薬の調査研究、再興のために「伊勢くすり本舗」を立ち上げたのだった。

■伊勢くすり本舗ブランドの確立とこれから

会社を立ち上げ、「百毒下し」の通信販売を行いながら、加藤氏は中国やインドへも出掛け、薬草の研究者を訪ねたり、代替医療を見て歩いたりして研究を重ねた。また、生家に伝わる古い書物を調べて伝統薬を再考し、伊勢の「萬金丹」を持ち帰った当時の人々がそれを地域で配ってご利益を分配していたという土産としての位置付けや、丸薬としての役割を知るに至った。

そうして萬金丹の復刻を進めながら、子供からご年配の方まで気軽にその効能を味わってもらうため、県内の大学や菓子メーカーと共同で開発したのが「萬金丹」である。平成20年12月より販売を開始した。平成22年末には萬金丹の復刻版が厚生労働省から認可され、薬として販



萬金飴

売できるようになり、現在は萬金丹と萬金飴の両方を販売している。おほらい町の屋台で販売していると「懐かしい」「昔よく飲まれた」等の声が聞かれると言う。平成23年2月には、「萬金飴」の販路拡大で地域資源活用事業の認定を取得し、現在は中小機構の地域活性化アドバイザー派遣事業を活用してブランドの構築に取り組んでいる。

現代医療で使用される薬の60%程度は、植物から単一成分を分離精製した薬だ。体に入った時に直接作用して効果がすぐに現れるが、毒性も強い。一方、薬草をそのまま使用するような伝統薬は、化学物質の複合体であるため作用を強める成分と弱める成分が混在している状態にある。そのため毒性も低い。どちらの薬が効果的かは症状によって一長一短だが、急を要しない症状や長期的使用には、毒性が低く、また、体の自然治癒力と協調して働く伝統薬の方が有利なことが多い。「現代薬にはないこのやさしい薬の良さを再発見してもらいたい、人々の健康に役立たい」と加藤氏は言う。伊勢という地域性と加藤家の歴史、そしてこの志が、伊勢くすり本舗のブランドの中心になることだろう。

折しも、日本においてもロハスやエシカルといったコンセプトで、自然や健康に配慮したライフスタイルが見直されつつあり、伝統薬が受け入れられる土壌が耕されている。既に次の伝統薬の復刻も研究中で、同社の更なる飛躍が期待される。